

## 近世中国における芸術と都市文化

### —都市図および関連する諸問題\*—

王 正華

都市に張り巡らされた意味の網の目を探究した<sup>1</sup>ことで有名なイタリアの小説家、イタロ・カルヴィーノはかつて、幾何学的な合理性と人々が織り成す生活模様の間に存在する緊張を表現する上で、都市はその重要な手段となる複雑なシンボルであると述べた。また、都市は多面的な構造を持ち、都市文化にあるのは階層序列ではなく、様々な可能性の網の目であるとも示唆している<sup>2</sup>。カルヴィーノは都市文化に関する洞察を現代の都市から引き出したと推定されるが、中国の伝統都市も同様に、「様々な可能性の網の目」として新しい文化的表現と社会的価値を創出したのであろうか。このテーマは一考に価する。中国の正統文化である儒教がその宇宙論や思想の輪郭において階層序列を明確に示した点を鑑みれば、これはなおのこと興味深いテーマである。伝統中国において都市がどのように描写されていたか、そして様々な歴史的文脈において都市がシンボルとしてどう機能していたかを探ることがこの考察の端緒となる。

シンボルとしての都市は、都市文化が浮き彫りにする人間の営みを描写する目的で、各々の文化で文学作品や視覚作品に広く活用されてきた。視覚作品としての都市図は、日本、中国、イスラム世界、西洋など多くの社会に存在しており、3000年以上の歴史を持つ。都市図は重要な文化遺物として、歴史学、地理学、都市研究、文化研究、美術史の各分野において研究の対象となってきた。それによると、視覚に訴える都市図には大別して2種類がある。都市の地図と、都市の生活や景観、風習を描いた絵画・版画・写真である<sup>3</sup>。

本論文では、1570年代頃から1644年までの明末中国の大都市で流行が始まり、19世紀初頭までその流行が続いた後者の分類に属する都市図（絵画や木版画における都市生活の描写）に焦点を当てる。本論文の目的は、過去3年間に著者が発表した3編の論文をその範囲の拡大を図りつつ統合する著書とすること、そして著者による今後の書籍企画の概念的枠組みとすることである<sup>4</sup>。

この著書は、17・18世紀中国の都市生活の描写に見られる芸術・文化・社会・政治動向をテーマとし、美

\*ご意見やご質問、ご提案をくださった会議参加者、特に金貞我氏とメラニートレーデ氏に対して謝意を表明したい。本プロジェクトは、密接に関連する一連の題材を対象とし、単一の主題に絞る典型的な研究論文とは異なり、これまでの著者の研究を振り返ってその要約を試みるものである。

<sup>1</sup> 著者が言及しているのは、イタロ・カルヴィーノの著作 *Invisible Cities*, trans. by William Weaver (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1974) である。

<sup>2</sup> Italo Calvino, trans. by Patrick Creagh, *Six Memos for the Next Millennium: The Charles Norton Lectures, 1985-86* (New York: Vintage Books, 1993), p. 70

<sup>3</sup> 例えば、矢守一彦『都市図の歴史—日本編』(東京:講談社、1974年)、矢守一彦『都市図の歴史—世界編』(東京:講談社、1974年)、Howard B. Rock and Deborah Dash Moore, *Cityspaces: A History of New York in Images* (New York: Columbia University Press, 2001) など。小説や映画の中で描写されている都市に関しては、Ben Highmore, *Cityspaces: Cultural Readings in the Material and Symbolic City* (New York: Palgrave MacMillan Ltd., 2005) を参照。都市の地図が持つ政治的、文化的意味に関しては、例えば、黒田日出男/メアリ・エリザベス・ベリ/杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』(東京:東京大学出版会、2001年) を参照。

<sup>4</sup> 拙稿については、王正華「生活・知識と文化商品：晚明福建版日用類書與其書畫門」『近代史研究所集刊』第41期(2003年9月)1-85頁、「過眼繁華：晚明城市圖・城市觀與文化消費的研究」李孝悌編『中國的城市生活』(台北:聯經出版事業公司、2005年)1-85頁、「乾隆朝蘇州城市圖像：政治權力・文化消費與地景塑造」『近代史研究所集刊』第50期(2005年12月)115-84頁を参照。特に記載のない限り、以下の考察はこれら3編の論文に依拠している。

術史、歴史学、都市研究などの分野の研究モデルに着想の源を求める学際的研究である。また、著者の限られた知識によると、都市図の出現は16世紀後半の中国だけでなく、15世紀後半のフィレンツェなどの西洋社会や16世紀初頭の日本でも見られた。つまり、都市図の出現は多くの文化に共通の現象であり、その意義については今後さらに探究していく<sup>5</sup>。

都市文化と近代化(modernity)の関係は19世紀パリに関する考察において確立されているが<sup>6</sup>、都市文化と近世におけるその描写の出現が“modernity”あるいは“modernities”と称される世界規模の歴史的発展に関する我々の理解にどう寄与するかについては、今後答えを出すべき、あるいは少なくとも取り組むべき主要な問題である。“modernity”およびそれを改良した形である“modernities”(様々な社会を近代的な状態に変容させる多様な可能性に重点を置いた表現)の問題性が議論的となっていることは筆者も承知している。また、中国における16世紀後半から19世紀初頭の時代を「近世(early modern)」と定めるべきか否かは、明清史研究の大きな論点となってきた。中国研究者は、西洋史研究から派生した「近世」という概念を自らの分野に適用することを疑問視してきたが、これは無理からぬことである。周知のように、この歴史的位置付けは、中国史の発展が中世から近代に至る西洋のモデルを踏襲するという含みを持ち、時として「近代化」を目的と見る目的論を前提としている。

著者はそれでもなお、いくつかの社会と密接に関連し、他の社会とも一部関連する明確な一連の歴史的現象の特性を明らかにする上で、「近世」をその概念的枠組みとすることを提案したい。言い換えれば、「近世」は西洋の歴史的経験のみから導き出された固定化された特性を表すものではない。さらに、文化を越えた観点から歴史的現象を研究するグローバルヒストリーの視点に立てば、世界の諸文化の多様性や差異が認められると同時に、歴史研究におけるその共通性の意義も認められるべきである。この意味において、17・18世紀中国の歴史は、「近世」という概念的枠組みの中で見直すことが可能であり、「近代化」の問題性に関する洞察に満ちた考察を与えてくれる<sup>7</sup>。

この論文では、関連する三つの問題、すなわち風俗画の興隆、文化消費の階層分化、都市意識と地方から都市への文化的生産の場の移行を探究する上で、中国の都市図がどのような役割を果たすかを主に考察する。これらの3点について論じたのち、最後に、近世において世界各地で同時に見られた現象、すなわち都市が源泉となって文化的表現と社会的価値が創出された現象を取り上げる。

## 1. 都市図の概観

17・18世紀中国では、「都市図」を表す統一的な用語は存在しなかったものの、一部の都市図は、山水画、人物画、花鳥画といった伝統的なジャンルと明確に区別される絵画の一分野として広く認められていた。「清

<sup>5</sup> 都のあった京都を描いた屏風絵に言及している日本最古の記録は1506年のものである。Matthew Philip McKelway, *Capitalscapes: Folding Screens and Political Imagination in Late Medieval Kyoto* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2006), pp. 1-2を参照。例えば、西洋の都市図研究に関しては、Christopher Brown, *Dutch Townscape Painting* (London: National Gallery, 1972)参照のこと。この参考文献およびその他にも関連資料を提供して下さったCraig Clunas教授に感謝の意を表明する。

<sup>6</sup> 19世紀パリの近代化に関する現代の知識は、言うまでもなくシャルル・ボードレーとヴァルター・ベンヤミンに負うものである。最近の研究に関しては、Patrice Higonnet, trans. by Arthur Goldhammer, *Paris: Capital of the World* (Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 2002; French version, 1999)を参照。

<sup>7</sup> 「近世」という概念に関する上記の考察については、『歴史学研究』の特集を読むことが大変有益であった。『歴史学研究』821号(2006年11月)、特集「近世化を考える(1)」を参照。この特集を紹介してくださった神奈川大学の中村政則教授に感謝申し上げたい。この特集では、日本史における「近世」の概念も取り上げられている。日本で都市図が出現したのは中世末期であったが、近世日本において都市図が流行したことは歴史学者や美術史学者の間で以前からよく知られている。

明上河図」と題する作品に関するいくつかの記録が示すように、この題名は個別的なものではなく、賑わいを見せる都市生活の一般的な姿を描いた作品を指す総称的なものである。近世中国では、北宋王朝(960～1127年)の首都であった開封、現代の首都である北京、また南京・蘇州・揚州などの南部の重要都市にこうした都市生活の姿が当てはまるであろう(図1)。都市図としての「清明上河図」では、巻物・掛軸・屏風といった形態も、現在北京の故宮博物院が所蔵する最古の「清明上河図」との関係も問題とされなかった。

故宮博物院所蔵の「清明上河図」は北宋時代の画家である張澤端の作品とされており、明末中国で最も知られた作品であった可能性が極めて高い(図2)<sup>8</sup>。この作品の人気の高さを示す言い伝えがある。明末の文学界の第一人者、王世貞(1526～1590年)は、この作品に刺激を受けて、あの官能的な小説『金瓶梅』を書いたというのである。しかし、この宋代の「清明上河図」が明末にいかに関心されていたとしても、明末から清(1644～1911年)中期に制作された大半の「清明上河図」は、直接的にも間接的にも宋代の「清明上河図」を踏襲した作品ではない。宋代の「清明上河図」は同名の後代の作品に、地方から城郭都市に蛇行して流れる川を描いた巻物という枠組みを提供したが、両者の類似性は都市の建造物や街中の人々の様子の詳細な描写にまでは及んでいない。このことは、後代に「清明上河図」を描いた画家の大半は宋代の「清明上河図」について明確には把握していなかったという著者の主張を裏付ける。

明清時代に描かれた「清明上河図」は少なくとも60作品が世界各地に現存しており、その大半が制作年、作者共に不詳であるか、偽の署名が入っている<sup>9</sup>。このような中で、1577年という制作年が判明している趙浙の作品は特異な存在であり、明末において都市図が流行し始めたことを示す一例と言える。寧波出身の無名画家である趙浙は、16世紀半ばに蘇州を中心に活躍した呉派を彷彿させる様式を用いている<sup>10</sup>。実際、明末清初の蘇州は書画の贋作制作の中心地となっており、「清明上河図」と題した巻物はそうした贋作の定番であった<sup>11</sup>。

明末の作品と推定される都市図は、「清明上河図」と題した様々な巻物の他にもいくつかある。例えば、画卷「南都繁會」「上元燈彩」はいずれも明の副都・南京の賑わいを描いた作品である(図3・4)。この2本の巻物の主たる焦点は、南京のような大都市で盛んに繰り広げられた商業活動や演劇的な光景に置かれている。南京とその名所旧跡は、明末のある有力な学者官僚が制作を依頼した書物の中にも登場しており、その中では、主に歴史的背景と文学作品中の描写に基づいて選ばれた南京の40の名所が描かれている<sup>12</sup>。

上記の明末の都市図はいずれも、その存在も芸術活動も歴史上忘れ去られて久しい無名の職業画家(または版画家)の作品である。しかし彼らの作品は、その後の中国美術史上類を見ないような重要なシンボルとして都市を作り出し、作り変え、そして後代の都市図が手本とするモデルを確立した。その一つが、乾隆帝(在位1736～1795年)に仕えた宮廷画院画家の合作によるいわゆる院本「清明上河図」である。乾隆版院本

<sup>8</sup> 実際、この作品は現代中国でも最もよく知られた絵画の一つであり、2002年12月に上海美術館が開催した展覧会では、この作品を見ようと大勢の観客が押しかけ、少なくとも3時間は行列に並ばなければならなかった。

<sup>9</sup> 明清時代の「清明上河図」の中には、16世紀の第2四半期に活躍した蘇州の著名な職業画家、仇英の署名が入った作品もある。

<sup>10</sup> 中国絵画史において忘れ去られた存在である画家、趙浙に関する歴史的記録は残っておらず、唯一の例外は、岡山県にある林原美術館所蔵の巻物「清明上河図」に記された署名である。趙浙は署名の中で、自分の出身地を四明、すなわち寧波と記している。

<sup>11</sup> 楊臣彬「談明代書畫作偽」『文物』no. 8(1990年)148-55頁、楊仁愷編『中國古今書畫真偽圖典』(瀋陽:遼寧画報出版社、1997年)148-55頁、Ellen Johnston Laing, "Suzhou *Pian* and Other Dubious Paintings in the Received Oeuvre of Qiu Ying," in *Artibus Asiae*, vol. 59, no. 3/4 (2000), pp. 265-95を参照。

<sup>12</sup> 朱之蕃『金陵圖詠』『中國方志叢書』(台北:成文出版社、1983年)を参照。この挿絵入り書物についての考察は、Si-yen Fei, "Negotiating Urban Space: The Making and Remaking of the Southern Metropolis in Sixteenth- and Seventeenth-Century China" (PhD dissertation, Stanford University, 2004), pp. 162-67を参照。

「清明上河図」は、乾隆帝の治世下で見られた数多くの事物や光景を盛り込むために、それ以前の「清明上河図」で用いられたあらゆる場面描写を取り入れようとしている。乾隆帝が積極的に関与した他の文化的表現と同様に、この「清明上河図」にも卓越した技巧が細部に至るまで施されており<sup>13</sup>、その極めて包括的な性格と相まって、安泰な清王朝下で多様性と繁栄を謳歌する世の中が具現されている。

院本「清明上河図」には、乾隆帝の輝かしい治世下にある千変万化の世界として設定された都市が描かれているが、乾隆帝時代の清王朝という象徴的な枠組みの中で、他にも新しい都市のイメージが生み出されている。例えば「京師生春詩意」は、敬虔で慈愛に満ちた君主としての乾隆帝が職務を果たした北京の皇宮の敷地や祭礼の場が新年の雰囲気包まれている様子を描いている。一方、画卷「盛世滋生図」は蘇州のイメージを、叙情に溢れ牧歌的な風景が広がる16世紀の文人の理想郷から、建造物が立ち並び、商店街が賑わいを見せ、人々が生き生きと活動する活気溢れる都市へと変貌させている。

絵画の一つのジャンルとして、都市図は清の宮廷の芸術・物質文化が持つ意味の網の目の中で特別な地位を得た。上記の三つの作品はそれぞれ普遍的な都市、首都、そして江南地区で最も重要な文化都市を描いており、いずれも独自の象徴的な意味を持つが、全体としては、乾隆時代の宮廷が創出した芸術的シンボルの一つとして、都市が清帝国の正当性を支える重要な役割を果たしたことを示している。

18世紀中国における都市図の人気の高まりは宮廷内にとどまらなかった。「清明上河図」の制作が蘇州や揚州<sup>14</sup>などの都市で続く一方で、「盛世滋生図」と非常に近似した蘇州のイメージを描き出した色鮮やかな木版画が販売され、中国南東部や日本に広く出回った。旧正月の行事の装飾に用いられたこれらの版画は、望ましい統治と都市の建造物の関係に重点を置くことにより蘇州政府と清王朝を賛えるものであり、このような建造物を代表したのが、乾隆5年(1740)に完成した蘇州の象徴的な建造物である萬年橋であった<sup>15</sup>。

こうした旧正月に用いられた蘇州版画の中に、蘇州の商業地域に焦点を当てているものの、蘇州や他のいかなる特定の都市とも一見関連のない題名を冠した作品がある。この題名「三百六十行」は「三十六行」を誇張した表現で、「三十六行」とは、当時の好景気の中で発展した各種商売を表す非常に包括的な言葉として、明代中期に生まれた言葉である<sup>16</sup>。18世紀の終わり頃、無地の背景に個々の職業を描いた作品が人気を博すようになり、19世紀には、広東で制作される輸出絵画に欠かせない存在となった<sup>17</sup>。これらの絵画や版画は、18世紀中国における都市生活、商売、個々の職業の結び付きを明らかにしており、繁栄する都市であった蘇州の商業活動や商業サービスにはあらゆる職業が存在したのであろう。

<sup>13</sup> 例えば、乾隆時代の官用の陶磁器からもあらゆる形状や釉薬への熟達うかがえる。

<sup>14</sup> 北京の故宫博物院には、石濤(約1642~1707年)の作品と様式が類似していることから18世紀の揚州で制作されたと思われる「清明上河図」が数点所蔵されている。

<sup>15</sup> 18世紀の蘇州を彫った都市図に描かれている商業文化に関しては、Yachen Ma, "Picturing Suzhou: Visual Politics in the Making of Cityspaces in Eighteenth-Century China" (PhD dissertation, Stanford University, 2006), chapter 1を参照。ただし、都市を描いた蘇州版画が制作された年代の推定と、その消費者が専ら中下層商人であったとする結論には同意できない。

<sup>16</sup> 徐珂編『清稗類鈔』, vol. 5 (北京: 中華書局, 1996年), 2288頁、Huang Shijian / William Sargent『十九世紀中國市井風情』(上海: 上海古籍出版社, 1999年), 1頁を参照。

<sup>17</sup> 『十九世紀中國市井風情』を参照。18・19世紀中国では、地方の商品や職業に焦点を当てた冊頁や木版画でも様々な商売が描かれた。この種の絵画や版画は都市図以外の風俗画の主要な形態であった。

## 2. 都市図と風俗画の興隆

上に挙げた都市図はその来歴や意味においてはそれぞれ異なるが、絵画の一分類としては、17・18世紀中国における風俗画の興隆に関する重要な問題に光を当てている。風俗画 (genre painting) は西洋の概念であるが、中国にとって全く無縁というわけではない。中国には、地方の風習や生活に関する調査が宮廷と地方政府によって行われ、それらが視覚的形態で描写される長い伝統があったからである<sup>18</sup>。したがって、現実世界に生きる庶民の日常生活を描いた中国絵画を風俗画と呼ぶことができるであろう。その意味する領域については「日常生活」「庶民」「現実世界」という概念などと同じく、明確にする必要があるが、著者が研究する都市図も「風俗画」の範疇に入れることができる。さらに重要なことに、風俗画は都市図に、地方の生活様式や社会風習を描写する中国の伝統という観点、そして、多くの文化で都市の日常生活が芸術の対象となったという観点の双方からの考察が可能な明確な意義を与えてくれる。都市図は、17・18世紀中国における風俗画の重要な要素として、都市化や都市文化と風俗画の興隆を結び付ける役割を果たす。

中国の風俗画は明末よりはるか以前から存在した。宋代の画卷「清明上河図」がその最も適切な例であり、また宋代に顕著に見られるようになった、農村生活と農民の姿を描いた多くの作品もその例である<sup>19</sup>。しかし、関連資料と現存作品の予備調査によれば、大量の都市図が出現したのは17・18世紀においてであり、それ以前の時代にはこうした現象は生じなかったと考えられる。さらに、宋代から明代末期にかけては、「盛んに」と形容できるほど風俗画の制作は行われなかった。第三に、宋代に風俗画が流行していたとしても、その主題の焦点は農民と農村生活であり、その主な支援者は昔から美術収集や美術鑑賞を行ってきた人々、すなわち皇帝・貴族・文人であった<sup>20</sup>。近世中国の風俗画では主題と支援者の点で大きな変化が見られた。主題の焦点が都市生活に移行し、消費者層が教育水準の高い上流階級以外にも拡大したのである。この2点については以下でさらに考察する。

美術史の観点から見ると、風俗画の興隆は、都市生活に焦点を当てた新しい主題に対する社会の大きな関心を示しただけでなく、芸術の主流から逸脱した様式や趣向の出現を暗示した。町の生活を鮮やかな色彩で詳細に描写する都市図の様式は、一般的な美的基準からはかけ離れていた。さらに、都市図の鑑賞には、高尚な芸術の理解に要する文学的素養も、明末までに形成されていた中国絵画の概念の中心となる正統的な画風の系統に関する知識も必要としない。この意味において、都市図は墨一色の山水画とは対照的な新しい美的趣向を示した。伝統的な中国の美術実践・理論では、主として文人画家によって確立された山水画の叙情性や高い精神性が正統なものであると考えられていたのである<sup>21</sup>。

18世紀の都市図は、文人が理想とする芸術からさらに逸脱していった。というのも、宮廷で制作された都市図、蘇州で制作された都市図のいずれも、17世紀に流行した都市図とカトリック宣教師によってもたらされた外来の技法を織り交ぜた様式を用いたからである。都市図における明暗法や遠近法の使用は、家屋や橋

<sup>18</sup> 盧宣妃「統理人倫以成王教：清宮風俗圖與中國風俗觀」『故宮文物月刊』第23卷第6期（2005年9月）、54-63頁を参照。

<sup>19</sup> 農村生活を主題とする宋代の作品に関しては、Wen-chien Cheng, "Images of Happy Farmers in Song China (960-1279): Drunks, Politics and Social Identity" (PhD dissertation, University of Michigan, 2003)を参照。

<sup>20</sup> Wen-chien Cheng, "Images of Happy Farmers in Song China (960-1279): Drunks, Politics and Social Identity", chapter 3 and 4

<sup>21</sup> 中国の美術理論、特に文人層の美術理論に関する先駆的な研究については、Susan Bush, *The Chinese Literati on Painting: Su Shih (1037-1101) to Tung Chi-ch'ang (1555-1636)* (Cambridge: Harvard University Press, 1971)を参照。明末の絵画伝統の形成と当時の社会・文化動向との関連性に関する詳細な考察については、王正華「從陳洪綬的畫論看晚明浙江畫壇：兼論江南繪畫網絡與區域競爭」『區域與網絡』（台北：國立台灣大學美術史研究所、2001年）、329-79頁を参照。



や城壁を包含する構築環境としての都市の特徴を際立たせ、都市の様々な建造物に暗示された政治的意味合いを強めている。都市図の消費者に新しい様式を提供したこうした西洋の技法の存在は、18世紀における中国の視覚文化が均質なものであったという我々の認識を変え、大航海時代における中国、日本、西洋の多国間交流について論じるための広い視野を与えてくれる<sup>22</sup>。

### 3. 都市図と文化消費

都市図は、巻物・木版画を問わず、主要都市部において芸術作品の文化消費がますます盛んになったことを表している。明末における経済成長と消費主義の高まりは、商店や露店で質の低い安価な芸術作品を購入する非エリート顧客層を対象とした美術市場を生み出し、そこでは都市図が重要な役割を果たした。明末の著名な学者官僚である李日華（1565～1635年）が記しているように、北京では巻物の都市図を扱う商店が非常に多く、その1巻当たりの価値は銀1両であった。これは、明末の福建で制作され、福建地区と江南地区で流通していた質の低い日用百科事典一式にほぼ相当する価格である。この金額は、明末に書物や芸術作品を購入できた人々の基礎購買力を測る基準となったようだ。銀1両で質の低い芸術作品や書物が購入でき、巻物の都市図と福建の日用百科事典は文化消費の一番下の階層に位置したのである。

明末中国における都市図と日用百科事典の消費者をさらに評価するためには、これら2種類の文化的産物の内容や形態、詳細について徹底的に分析する必要があるが、ここではいくつかの所見のみを提示する。17・18世紀中国において制作された都市図の多くには、そこに描かれている商品や商売、サービス、構築環境などが分かるような文字が記されている。前述したとおり、芸術的伝統を持たず、実生活に近い場面描写が多い都市図は、抽象的な山水画を鑑賞したり、著名な画家の手による高価で質の高い芸術作品を購入したりできる文化資本を持たない人々の心を捉えた。また、日常生活に必要な読み書きができる鑑賞者、例えば『三字経』などの初歩読本を読む能力や、会計などの専門技能を学ぶための手引書を参照する能力がある者は、読み書きのできない鑑賞者よりも都市図を楽しむことができた。

明末の福建の日用百科事典を理解するには、都市図と違って読み書きの能力が必須であったが、求められるのが少なくとも日常生活に必要な読み書き能力である点と同じであった。南宋時代（1127～1279年）のものに倣って作られた伝統的な日用百科事典を踏襲している章を除き、福建の日用百科事典には、都市環境の中で最も発達した娯楽や社交の術をはじめ、都市文化に関する知識が満載されていた。都市図の鑑賞者は、日用百科事典の読者と類似した経済的、文化的背景を持っていたものと思われる。すなわち、明末の経済発展の恩恵に浴し、基礎購買力を持ち、そのため文化消費者の最下位層を形成した、日常生活に必要な読み書きができる人々である。これらの消費者は都市文化の開花に喜びを見出し、そして、その彼らによる需要を満たすために、質の低い安価な芸術作品と書物の市場が形成された。

皇帝と貴族を除けば、芸術作品、特に委託制作による作品を購入できたのは、伝統的に主として文人層と富裕商人層であった。販売目的で制作される商品としての絵画——例えば、北宋の首都開封で土産物として販売された絵画など——は明末にはすでに長い歴史を持っていたが、手頃な価格の芸術作品に対する庶民の大きな需要は、安価で質の低い絵画の未曾有の大量制作を引き起こした。明末の美術市場では、価格と品質の水準による芸術作品の階層分化が大きく進んだものと思われる。同様に、概して粗悪なものが少なくとも

<sup>22</sup> 日本の研究者は、蘭学という枠組みの中で西洋が日本の芸術に与えた影響について論じる際、17・18世紀における日本と西洋の相互関係を強調する。一方、同じ時代の中国の木版画とそれが日本の時代に及ぼした影響を専門とする日本の研究者は、中国と日本の相互関係に注目する。著者はここで、中国、日本、西洋の複雑な多国間関係を考察することを提案する。今日もそうであるように、二つの地域の間文化交流だけを切り離すことは不可能だからである。

40 版現存する福建の日用百科事典も、価格と品質の点で書物市場の最下位層を形成した。

経済資本から文化資本への転換、あるいはその逆の転換は、この主題に関してピエール・ブルデューが権威ある研究を行った 1970 年代のフランス社会よりも、明清時代の中国の方が困難であったにもかかわらず<sup>23</sup>、商人から成る支援層の研究によると、17・18 世紀中国の富裕商人層はその経済資本を活用して、文化資本を有する者たち、すなわち文人層の趣向を模倣しようと努めた<sup>24</sup>。明末には、芸術作品を購入する資力を得る人々の増加に伴い、「雅」と「俗」という二つの概念をめぐる議論が活発化した。研究者たちが指摘するように、この二つの趣向基準の関係は弁証法的なものであり、静的なものではないが、異なる階層の文化消費者の間には強い緊張関係が生まれた。こうした中で、都市図と、福建の日用百科事典が提供する芸術に関する知識は、文人たちの著作の中で「俗」な趣向の象徴として描かれた。一方、そうした文人が描く知識とは異なる福建の百科事典の中の芸術知識は、庶民が独自の芸術認識を形成できる社会的空間を作り出した。17・18 世紀中国で見られた文化の模倣は、質の高い芸術作品を買う余裕があり、文人層と頻繁に交流できた富裕商人に限られていたようだ。

明末に起きた都市文化の高まりを明清交替が中断させたか否かに関しては、いまだ答えが出ておらず、また、明末における文化消費の階層分化が清初も続いたか否かについても不明である。しかし 18 世紀には、画卷「清明上河図」や上記の都市図のような色鮮やかな大量の版画の出現が、手頃な価格で芸術の香りを楽しむもうとする庶民の要求を満たした。

18 世紀中国の芸術動向の中で、長年にわたり最もよく研究されてきたのは揚州派である。中でも、鄭燮(1693～1765 年)などの画家たちによる新しい主題と様式を持つ作品を購入する新たな社会階層が出現したか否かを始め、パトロンと様式の問題に関する問題は重要なテーマとなってきた<sup>25</sup>。揚州派の作品においては、社会的、経済的地位の観点から見た新たな芸術作品の購入層の出現を確認することは依然困難である。その主な理由として、揚州の画家たちが、文学教育を受けた文人画家という伝統的分類に属していたが、実際は絵画制作で生計を立てていたことが挙げられる。また様式の点においても、よく描かれる主題こそ山水から人物や花鳥に移行したものの、主流の山水画が持つ洗練された画風を維持していた。さらに重要なことに、絵画が商品として制作される社会経済構造に関して言えば、揚州派の絵画は既成商品としてではなく、委託制作という形で美術市場に登場したのである。揚州派の絵画は、消費活動における新たな傾向を生み出すことも、文化消費市場の階層分化をもたらすこともなかった。

対照的に、質の低い安価な都市図は、芸術作品を取り扱う店の定番であり、主要都市部で広く販売される一般的な商品であった。都市図は様式・品質・趣向の点で文人画とは対極にあった。その意味において、都市図は新しい社会階層——芸術作品や書物に対する自らの欲求の充足を文化的産物に求め、近世中国における文化消費市場の階層分化をもたらした、わずかながら資力を持ち日常生活に必要な読み書きができる人々——の出現を探究するための極めて重要な資源となる。

<sup>23</sup> Jason Chi-sheng Kuo, *Huizhou Merchants as Art Patrons in the Late Sixteenth and Early seventeenth Centuries*, in Chu-tsing Li, ed., *Artists and Patrons: Some Social and Economic Aspects of Chinese Painting* (Seattle: University of Washington Press, 1989), pp. 177-88, Ginger Cheng-chi Hsü, *A Bushel of Pearls: Painting for Sale in Eighteenth-Century Yangchow* (Stanford: Stanford University Press, 2001), chapters 2 and 3 を参照。

<sup>24</sup> Pierre Bourdieu, trans. by Richard Nice, *Distinction: A Social Critique of the Judgment of Taste* (Cambridge: Harvard University Press, 1984) を参照。

<sup>25</sup> *A Bushel of Pearls*, chapters 4 and 5

## 4. 都市意識と高い文化的価値を有する場所としての都市

前述したように、明清時代の都市図は、都市の生活と文化の二つの側面に焦点を当てた明確で一貫した都市の見方を示している。一つは商品と商業活動という側面、もう一つは演劇的行為と観客性という側面である。都市図では、歩行者、売り手、買い手、見物人として行動する大勢の人々によって、この二つの側面が関連付けられている。こうした都市の見方は、従来の一般的な見方とは異なるものであった。例えば、宋代の「清明上河図」は労働に関連する活動に重点を置いたし、伝統的な都市の地図の大半は、様々なレベルの政府機関や学校を中心とする公的な観点から都市の姿を伝えた<sup>26</sup>。

宋代の「清明上河図」は宮廷画であった可能性が極めて高いが、宮廷や政府の委託で制作された都市図と一般的な商品として美術市場で販売された明清時代の都市図は、全く異なる視点で描かれたものと思われる。明清時代の都市図は、活気あふれる都市の埃っぽい生活に喜びを見出す、文学的素養のない庶民の視点から都市を描いた。この意味において、都市生活が持つ日常性や消費主義、華やかさといった性質は、鑑賞に値する重要な文化的表現となった。文人の中には、南部の大都市で見られた商業化や商品化、そしてそれらに伴う俗っぽいイメージを批判する者もいたが、都市で販売された質の低い都市図は、庶民が都市の商品や視覚文化に触れる機会を提供したのである。

上記の考察から二つの点を導き出すことができる。第一に、近世中国では、都市の文化と生活に対する明確な意識、すなわち都市を他の人間環境と区別し、都市に関連する活動や文化的表現を楽しもうという意識が出現した。この都市意識は、都市とそれに関連する生活様式を主題とした『金瓶梅』などの小説にも表れている<sup>27</sup>。前述したように、宋代の画卷「清明上河図」に関する明末の多くの記録の中に、『金瓶梅』とこの巻物を関連付ける言い伝えを見出すことができる。都市生活のこの二つの重要な文化的表現を結び付ける言い伝えの存在は、都市意識が人々の話題や心理に浸透しただけでなく、様々な形態の文化的表現の源泉ともなったことを示唆している。

第二に、江南地区と首都北京（18世紀の清宮廷も含む）における都市図の広範な流通は、高い文化的価値を有する象徴的な場所としての都市の活力を示した。ここで言う「高い文化的価値を有する場所」とは、社会的、文化的威信を集めると伝統的に考えられてきた具体的な場所や物理的空間である。

明末以前には、美しい景勝地、あるいは著名な歴史的遺跡や宗教的聖地などが、中国の社会的エリートの注目を集めた。フレデリック・モートが中国の都市に関する独創性溢れる研究の中で指摘しているように、こうした高い文化的価値を有する場所の大半は、都市生活の境界を示す伝統的なシンボルである都市の城郭の外側に位置していた。畑を耕し学問を修める「耕読」が儒教の教える理想的生活とされている間は、都市や都市生活の重要性は軽視されていた。この理想的生活には、一つの生活様式とそれに付随する経済・社会基盤だけではなく、ある特定の社会的価値が伴った。地方の農村生活からは、商業化や商品化、観客性という都市文化の特性を好ましいと見なす社会的価値観は生まれにくかったのである。高い文化的価値を有する場所としての都市の出現が、17・18世紀中国における主要な社会的価値観を変容させたことは明らかである。

フレデリック・モートは、中国の都市と地方は断絶的な関係ではなく連続的な関係にあるため、都市と地

<sup>26</sup> 張哲嘉「明代方志中の地圖」黄克武編『畫中有話：近世中國的視覺表述與文化構圖』（台北：中央研究院近代史研究所、2003年）、288-312頁を参照。

<sup>27</sup> 『金瓶梅』と明末における都市文化の急速な発展の関係に関しては、文学研究者によって考察が行われてきた。例えば、Shang Wei, "The Making of the Everyday World: *Jin Ping Mei Cihua* and the Encyclopedias for Daily Use" in David Der-wei Wang and Shang Wei, eds., *Dynastic Crisis and Cultural Innovation: From the Late Ming to the Late Qing and Beyond* (Cambridge: Harvard University Asia Center, 2005), pp. 63-92を参照。



方という西洋の二分法を中国に適用することはできないとも指摘している<sup>28</sup>。また、社会経済史の研究者は、19世紀後半に上海が近代都市として台頭してくる以前は、17・18世紀中国における都市の規模と国際性は唐代（618～970年）や宋代の都市を凌ぐものではなかったと述べている。しかし、視点を統計や経済指標ではなく、都市意識や文学・視覚作品における都市文化の描写に移すと、全く異なる事実が浮かび上がってくる。

本プロジェクトでは、16世紀後半から19世紀初頭に制作された多数の都市図に焦点を当てると共に、都市生活を描いた小説に関する最近の研究を取り入れることにより、芸術作品の観点からこの事実を解明する。17・18世紀中国における高い文化的価値を有する場所としての都市の出現、そして都市生活に関連した文化的特性の発展は、我々が近代化の問題性について究明する手掛かりとなるであろう。

前述したとおり、人間社会の歴史的発展における文化的、社会的特性を明らかにするための分析の枠組みとしての近代化には複雑な問題があり、人文・社会科学の諸分野において激しい議論を巻き起こしている。ここでは、近代化の問題性、そして近代社会に向かう中国の歴史的過程を都市図がどう解明するかに関し、その全ての範囲にわたって考察を行うことはできない。しかし、差し当たり指摘できるのは、近世中国において都市が高い文化的価値を有する場所となったこと、そして、その歴史的時代に生じた文化的表現と社会的価値観の変容において、都市文化が決定的な役割を果たしたことである。したがって、都市の最も重要な描写の一つである都市図は、近世中国の特性を明らかにするという難題に適用する分析的、概念的手段を定める上で一定の役割を果たすはずである。

<sup>28</sup> Frederick W. Mote, "The City in Traditional Chinese Civilization," in James T. C. Liu and Wei-ming Tu., eds., *Traditional China* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc., 1970), p. 49. 同氏の "Millennium of Chinese Urban History: Form, Time and Space Concepts in Soochow," in *Rice University Studies*, vol. 58, no. 4 (1973), pp. 101-54 も参照。

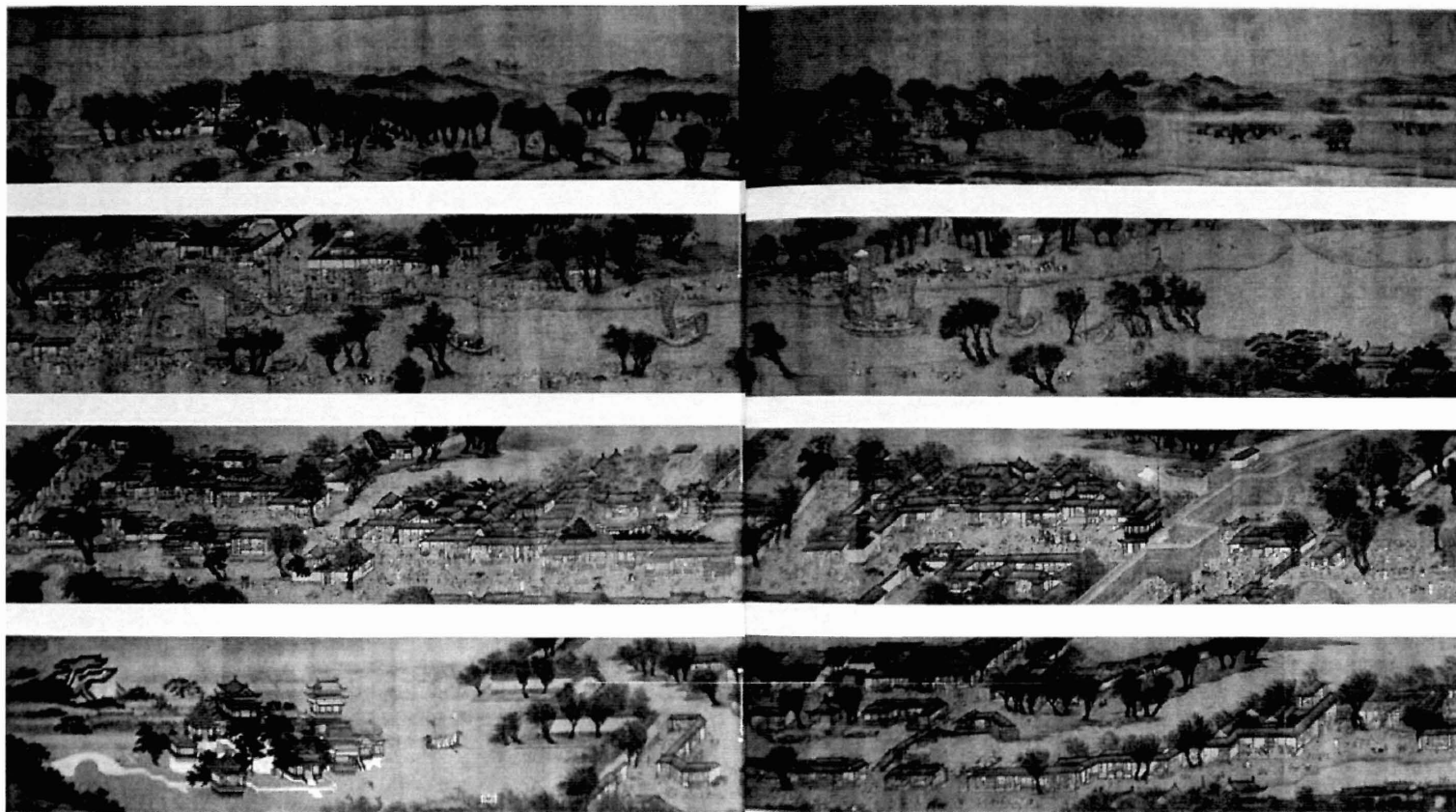


図1: 仇英 「清明上河図」 17世紀初頭 中国遼寧省瀋陽市 遼寧省博物館蔵  
張萬夫主編 《明四家画集》(天津 天津人民美術出版社 1995) 第231図

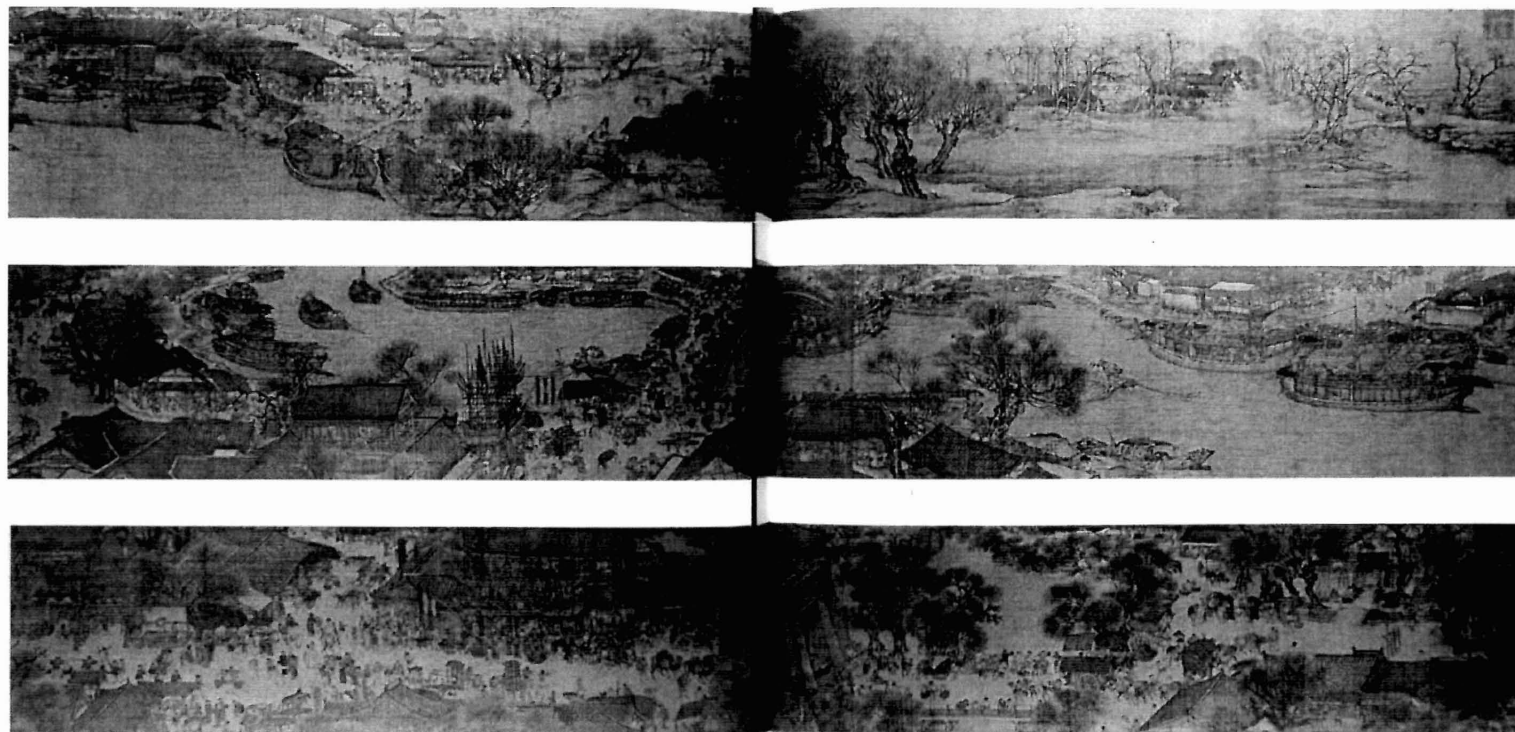


図2: 張擇端 「清明上河図」 11~12世紀 北京 故宮博物院蔵

傅熹年主編 《中国美術全集》 絵画編3 両宋絵画 上 (北京 文物出版社 1996) 第51図

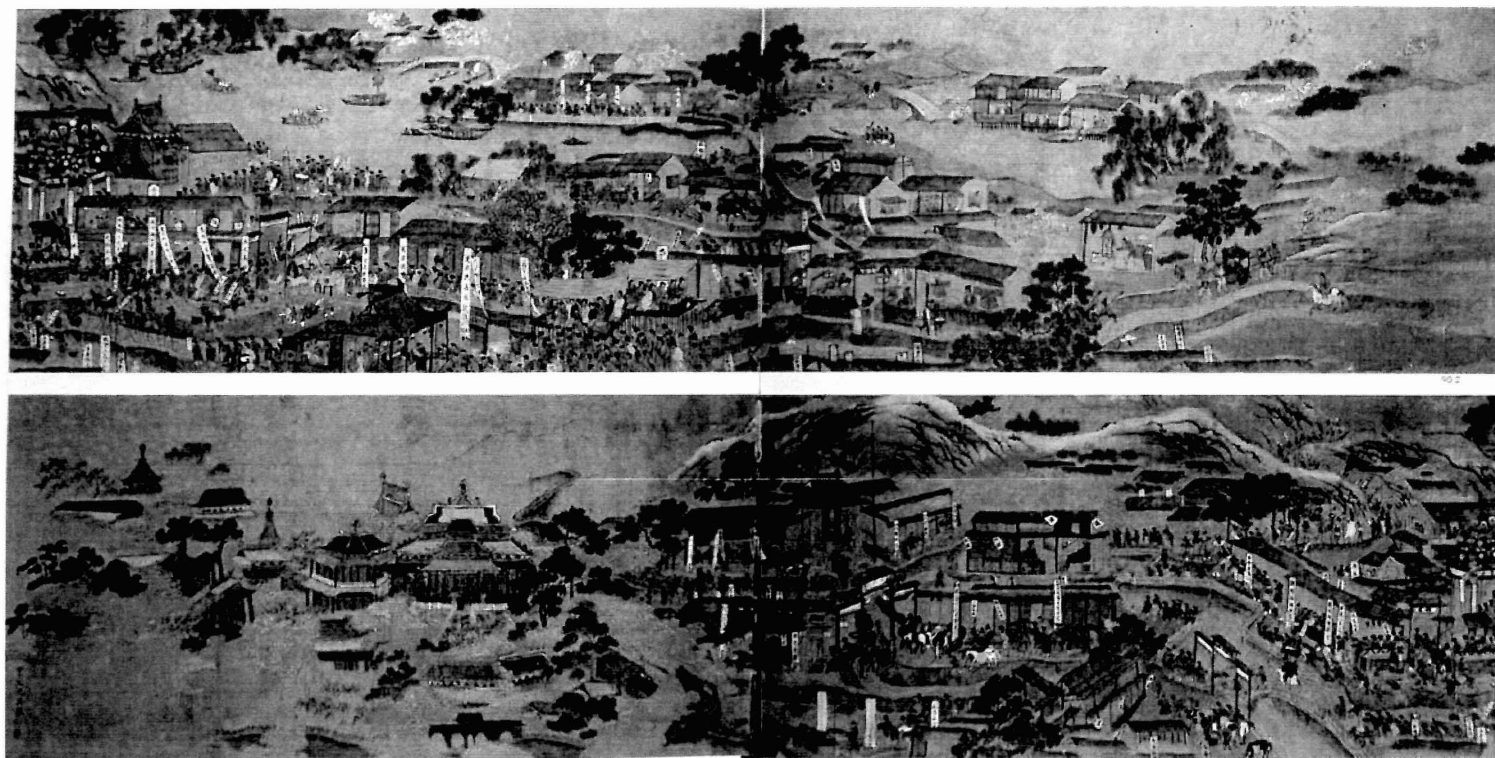


図3: 筆者不明 「南都繁會」 17世紀初頭 北京 中国国家博物館蔵  
中国歴史博物館編 《華夏之路》 第四冊 (北京 朝花出版社 1997) 第90図



図4：筆者不明 「上元燈彩」 17世紀初頭 台湾台北市 個人蔵